

建学の精神の現代的意味

— 西南学院大学の理念を事例として —

深 谷 潤

The Present Meaning of the School's Founding Spirit:
Seinan Gakuin University's School Motto

Jun Fukaya

はじめに

今日の日本の大学をとりまく環境は厳しさを増している。2006年には、私立大学の約4割が定員割れの状態であり、2007年は入学定員と志願者数がほぼ一致する「大学全入時代」の到来と言われた。そんな中、現状の課題を打開することだけでなく、将来像を模索し、さらに計画的に実行することが多くの大学に求められている。その際、私立大学はもとより、国立大学法人を含め、各大学が独自の建学の精神をもち、将来のビジョンを再構築することが極めて重要である。また、その建学の精神は、過去の創設者の理念を繰り返すだけでなく、歴史を振り返りつつ、さらに新しい意味を見出し将来に備えるために、常に解釈されなければならない。

大学教員の立場から、西南学院の建学の精神（Seinan, be true to Christ!）の現代的意味を考える場合、それは、大学の理念を今日的に解釈し直すこと、と言えよう。近代の大学理念は、ベルリン大学設立の基盤となったと言われるフンボルトの理念（研究と教育の推進）である。しかし、最近の研究によると、それは神話であったと指摘されている。¹ 仮にそれが神話であり、19世紀初頭のベルリン大学の理念でなかったとしても、研究と教育は、大学の重要な機能であることは間違いない。しかし、今日研究が充分可能な環境にある日本の大

学は限られ、一部を除き、教育や就職支援など、学生や社会の要求に答えなければ存在意義すら喪失しかねない大学が少なくない。江戸時代の寺子屋ですら、文字を学ぶためには、生活習慣や礼儀がきちんとしていることが前提条件となっていたと言われている。² 大学生は、指導される対象ではないことが建前であり、「学生相談」が実質的な指導（ガイダンス）となっている。世間では、「面倒見のいい大学」³ が人気を博している。しかし、そのような本来の大学の理念と大きくかけ離れた現実をどうとらえるべきかが、現代的意味を問う上での課題と言える。

1. 建学の精神の歴史性

さて、建学の精神は、一個人の信条が他の人々に共感され、さらに共有されて、学校建設という具体的な活動の機動力となっただけではなく、その後長い間、後世の人々の心の中に生き続けているものといえる。そのことを理解する上で不可欠な要素は、歴史的視点である。一般的に「伝統」と呼ばれているものは、過去の記憶の継承によって成立している。記憶するものが無くなった時点で伝統は消滅する。歴史も同様である。英国の歴史哲学者 E.H.カーが1961年にケンブリッジ大学で行った講演で、彼は、「歴史とは、歴史家と事実との間の相互作用の絶え間ない過程であり、現在と過去との間の尽きぬことを知らぬ対話なのであります。」⁴ と言ったが、歴史を作るとは、人々の記憶に長く残り、その記憶を纏める際に、削除されないものだけが過去の出来事として後年の人々に残される。残すか削除するかを決めるのは編集者としての「歴史家」であるが、その基準は、過去ではなく、現在や将来の人々にとって価値があるかどうかにある。つまり、時間を越えて残すべき価値がある事実が歴史上の出来事である。ドイツ観念論では、歴史を「時間のうちに外化された精神（äußerte Geist）」（ヘーゲル）として捉えている。⁵ また、実存哲学では、「絶対的存在へ近づくための唯一の仕方」（ヤスパース）⁶ と捉えられている。

このように、二人に代表されるドイツを中心とした近代・現代のヨーロッパの歴史観に沿うならば、歴史は、ある特定の時間のなかに存在する人間の意識に依存しつつ、さらにそれを超越した次元との接点を不可欠な要素としている。

本論で「現代的意味」を問う場合、現在において過去と将来のつながりを超越的に捉えた、いわゆる「歴史性（Geschichtlichkeit）」の観点から意味を問う立場をとることにしたい。その際、建学の精神の今日的解釈と将来的構想という二つの課題がある。まず、前者である今日的解釈から説明する。

2. 建学の精神の具体化

2.1 教育理念と教育目的

西南学院の理念としてしばしば登場するのは、C.K.ドージャー氏の遺訓「西南よ、キリストに忠実なれ！」である。この遺訓は、建学の精神として解釈されてきた経緯がある。そこで、建学の精神の意味を問う場合、その言葉が発せられた背景について弱冠考察を加えたい。

ドージャー夫妻の生涯を記録した学院創立 80 周年記念の冊子 SEINAN SPIRIT には、息子のエドウィン・B・ドージャー第 9 代学院長の一文が載っている。それによると、「父の一生のモットーと言い得るものは、フィリピの信徒への手紙 3 章の 12 節から 14 節であった。」と書かれている。

「(略) なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。」こういう気持ちから、父は『西南よ、キリストに忠実なれ』と言ったにちがいないと思う。⁷

この「忠実である」ことの意味は、E.ドージャー氏によれば、"being faithful" のことであり、父ドージャーにとって「一生の中心的思想であった」と言及されている。息子に対して、父は「実に厳しかった」。けれども、それは「子どもを思う厳しさ」であり、「愛しているから厳しかった」と記されている。また、坂本重武（シゲタケ）第 3 代西南学院大学学長によると、遺言は、

尚、余が夢寐（ムビ）の間も忘れ能はざる西南学院に、くれぐれもキリストに忠実なれと告げよ

を簡略化したものである⁸と説明されている。彼によると、「キリストに忠実」であるとは、「自己に忠実」であることを意味し、さらにその「自己（わたし）」は、「キリストを土台」として「忠実に立てられた家」に喩えられている。⁹

さて、この「Seinan, be true to Christ!」が発せられた背景は、1927（昭和2）年から表面化した日曜日問題があると思われる。つまり、キリストに忠実でない西南学院が前提にある言葉ではないか、と考えられる。スポーツに熱心で、日曜日に礼拝を守らない¹⁰学生やそれを支持する教員を厳しく罰したドージャー氏は、1929年3月に辞任することになった。学院を去った4年後に彼は亡くなる。遺言として、言うことを聞かない子どもを叱りつけるように、「忠実なれ！」といったのではないか。死ぬ直前の1週間、ドージャー氏の傍らにいたのは、福岡から小倉までわざわざ駆けつけたノン・クリスチャンの九州大学病院の医者だったと言われている。¹¹ 建学の精神は、キリスト者だけではない、すべての人に対して開かれていることを示すエピソードである。

これまでドージャー氏の遺訓をどのように理解すべきか、いくつか試みはあった。ドージャー氏の息子 E.B. ドージャー氏による「神と人にと誠と愛を」(Faith and Love to God and Man)¹²、また前院長 L.K. シート氏による 4L (Life, Love, Light, Liberty) (生命、聖愛、光明、自由)¹³ や最近の寺園院長の「世の光」(マタイ5:14 他)「地の塩」(マタイ5:13) など¹⁴、それぞれの言葉は、学院の精神を別の形で表現したものである。

建学の精神は、教育理念と言い換えることもできる。しかし、しばしば陥りやすい誤りに、教育理念と教育目的の混同がある。これは、新しい教育基本法のなかにも見受けられる。改正教育基本法の第1章のタイトルは、「教育の目的及び理念」であるが、実際に、教育理念に該当する条文が欠落し、教育目的(第1条)や目標(第2条)が書かれている。かろうじて、第3条に「生涯学習の理念」が示されているだけである。

本来、理念とは、「原理を創りだす力」(カント)であり、現実的な手段を通して達成される目的とは、次元が異なる。すなわち、現実を超越した次元において、現実の中にある人間の心に働きかけるメッセージといえる。そのメッセー

ジの背後には思想や神話、などの物語があり、それを伝承する文化や歴史が存在する。先の新教育基本法にみられるように、理念を半ば軽視する姿勢¹⁵は、現代日本の思想的基盤となる「物語」の崩壊と、歴史意識の脆弱さを示唆している。

さて、西南学院をはじめとして、キリスト教学校には、聖書がその思想の基礎を形成し、建学の精神として教育理念を謳っている。ちなみに、本学院の教育目的は、寄附行為1章1条によると、

「教育基本法、学校教育法に従い、キリスト教の主義に基づいて学校教育を行うことを目的とする。」(規定集 p.51)

とある。教育基本法が2006年に「改正」されたため、今後その目的の在り方に課題が残される。¹⁶

さて、理念が目的となる際、キリスト教学校の場合重要な表現は、「キリスト教主義」である。詳細は割愛するが、キリスト教に基づいた教育とは何かが明確にされずに、この目的を達成することは不可能である。したがって、教育理念としての建学の精神も、具体的な形として現れることはない。ちなみに、2008年度の学校案内の中で、西南学院は、「永遠の真理を追究し、社会に貢献する使命」をもった人間を育成することが寺園院長の挨拶¹⁷の中に記されている。

2.2 カリキュラムの中の建学の精神

建学の精神は、教育目的としてカリキュラムの中で具体的に展開されるべきものである。西南学院大学の場合、教育の特徴(あるいは柱)に次の4つをあげている。

①キリスト教教育 ②国際性 ③少人数教育 ④語学教育・情報処理教育

カリキュラムの特徴ともいえるこれら4要素のうち、①のキリスト教教育が建学の精神と直結した内容をもっている。他の3つも関係は勿論あるが、「キリスト教」と直接的な表現をとっているので、特別に説明を要する。

教育課程として目に見える形で具体化しているキリスト教教育には、主に4種類がある。卒業必修科目としての「キリスト教学Ⅰ、Ⅱ」、週3回のチャペルの時間、入学式・卒業式、クリスマス礼拝などの学校行事、そして学生・教

職員らの宗教活動である。これらの活動が顕在化している間は、キリスト教学校としての建学の精神は、過去から継続しているといえなくもない。問題は、目に見えないカリキュラム¹⁸に代表されるような、学校の雰囲気・スクールカラー、西南らしさ、ブランドという曖昧模糊とした空気である。この空気は、建物や施設の規模などにも大きく左右されるが、それ以上に重要なのが教職員の人間としての資質である。貴重な人格的出会いや啓発、様々な思い出深い出来事は、学生同士や教職員らの人間関係において生まれ、その舞台としてキャンパスが存在する。キャンパス自体の教育力¹⁹も確かにあり得るが、やはり重要なのは大学の構成員である。場所が人を造ることもあり得る。しかし、その場所をいつも整えるのはやはり、それにかかわる人間である。なぜなら、カリキュラムの中身は、科目の内容だけではなく、科目を展開する舞台や演出する人間の質も大きくかかわってくるからである。それらがうまく連携し合って理想的カリキュラムが形成されるのである。

したがって、広い意味でのキリスト教教育は、大学の教育全体を指しているとも言える。キリスト教信仰をもたない教職員であっても西南の雰囲気、エートスを体に染みつかせている²⁰人間であればだれでも、キリスト教教育の担い手である。

3. 理念と目的の関係

今日、日本の大学（短期大学含め）は、首都圏の大規模な有名大学から地方の小さな女子短期大学まで、国公私立の区別なく、様々な課題を抱えている。西南学院大学も例外ではない。学部や学科の再編や新設などの機構改革、建物の改築工事、大学院の充実、教授会をはじめとした運営組織の改革、さらに教職員の倫理向上など枚挙にいとまがない。これらの課題は、一般的に、建学の精神とかけ離れた形而下の問題のようにとられがちである。実際に、真理の探求や社会貢献は、スローガンや建前論に過ぎず、理想と現実のギャップは容易に埋まりそうにない。

さて、第二次世界大戦直後のドイツ、ハイデルベルク大学で『大学の理念』を著したヤスパースは、現代の大学の理念として、大衆化と技術化を含めて論

じている。この著作は、市民型エリート養成と言う従来の大学の在り方が崩壊している中で説かれた大学論であり、²¹ 歴史的状況は異なるものの、改革の必然性という今日的課題と共通する点も少なくない。

大衆化と関連するが、大学進学率が日本で50%を超えた現在、大学生の学力低下の議論と同時に、大学教員にも、教育力のアップが求められている。具体的には、授業の質の向上である。日頃の研究成果をそのまま講義していたかつての教授法ではなく、シラバスや授業計画案を作成し、講義をすることが今日半ば常識となった。

科目のそれぞれの授業の中で目指される小さな教育目標（ねらい）は、一見、教育理念と無関係に思われる。しかし、個々の目標は、科目全体の目的を細分化したものであり、その目的は、科目群となって学科や学部教育目的を構成する。学部の目的は、単独もしくは複数がより集まり、大学の目的の下部構造を形成し、大学の教育目的²²と結びつく。そして、大学の目的が、さらに建学の精神に繋がっている。論理的には、理念から目標に向かうべきものだが、この際、あえて逆方向をたどることで、教育の理念と教育現場のつながりを確認することも無意味なことではない。半ば逆説的だが、理想は現実と切り離されているからこそ、現実を動かすことができるとも言えるだろう。理念は決して現実的な達成目標ではなく、達成の原動力を生み出す源である。教育目標を一つずつ達成することの積み重ねが、現実全体を静かに前進させていると言える。比喩的には、理念には、太陽のような役割があると言える。理念は、「達成」という形で実現するものではなく、先述のように何かの原則の基礎（原理 Prinzipien）を創り出す力と考えられている。²³（カント：理性概念の略としての理念（Idee））西南学院の建学の精神、すなわち教育理念とも言い換えられるものの原点は、「キリスト」であるが、キリストによって力を得ること、そのことをドージャー氏の遺訓が象徴していると解釈できる。

4. 冷めた理念への対策

最後に、二つ目の課題である、将来的構想に一言触れておきたい。

建学の精神が、過去からだけでなく、将来から現在の我々に意味をもたら

すには、ヴィジョンとして、あるいは理念として熱を帯びて我々を暖め、熱くしてくれなければならない。現在の様々な大学の課題を解決するためにも、将来のあるべき大学像に近づくためにも、理念は、現実と切り離されていながらも、実際に、具体的な言葉や人間の行動を通して示されなければならない。誰が、どのようにしてそれを示すのであろうか。

50年以上前、キリスト教学校をめぐる二つの問題が指摘された。ひとつはキリスト教教員の不足、もう一つは世俗化である。²⁴ 当時のキリスト教学校は、「赤レンガのおしゃれな」イメージが人気を呼ぶと同時に、世俗化に埋没する、とキリスト者の間では、批判をあびていた。また、キリスト者を増員すれば、理念は教師を通じて具体化できるという発想も支配的であった。キリスト者にとっては、とても理想的な考えかもしれないが、實際上、限界があると思われる。むしろ、他宗教の信仰をもち、また、宗教をもたない教職員も含め、西南学院のスピリットに賛同するスタッフを増やすことに力を注ぐことが重要と考える。このスピリットは、歴史的にはキリスト教信仰を出発点としながらも、理念にてらした西南学院の「ファミリー・プロジェクト」²⁵ にコミットする意思表示をしたものの共同体（「教育共同体」²⁶）のメンバーによって共有され、また次世代に引き継がれていくものとする。ファミリーとした理由は、人間関係のもつ「温かさ」を表現するためである。精神は、何もしなければ冷えてしまうものであり、熱は目に見えず、感じ取ることしかできない。しかし、それは、人を動かし、物を動かし、歴史を動かすことができる。

建学の精神は、真理を誠実に探求する教師、すなわち研究活動に励み、その果実を教室で授業の中で展開する姿を通して、若者たちのこころを捉え、ゆさぶり、学問への興味を促す。それこそが、大学教員の教育の在り様である。教育はサービス（奉仕）ではあるかもしれないが、「サービス業」ではない。授業の中身を充実させるのは、学生へのサービスではなく、研究者としての自然な勤めの一つである。自ら知的好奇心を覚え、学生らにもそれを覚醒させること、それこそが、建学の精神を授業の中で実践することである。²⁷

先に触れたヤスパースは著書『大学の理念』のなかで、大学の重要な主な課題を挙げている。²⁸ その最初は、「大学は、共同体（研究者と学生）の中で真理

を探究する課題を担うこと」であり、次に、「真理は伝授されるべきものであるため、授業は大学の第二の課題である」と指摘している。つまり、大学教員は、研究し、それを伝えること、すなわち、研究活動を通して真理を求め、それを教育活動の中で学生たちに伝達していくこと、それが大学の理念であるといえる。²⁹

キリスト教主義の大学において、真理とは世界の創造主であり、キリストである。そこから、直接信仰に進むルートが、従来強調されてきたクリスチャン・スカラー育成の立場³⁰である。けれども、それと同時に、ヤスパースのように、大学という共同体の基礎には、人格的な交わりがある。現代社会において、人格的交わりを通して、真理探求が促進されることをより大切に考えたい。

結論として、建学の精神の現代的意味は、その交わりが喪失され、学部、学科がばらばらになる危険性を回避することであるといえる。キリスト者もそうでない者も、研究者としてのプライドと真理探求の姿勢を忘れずにいることと、学生や教員同志の人格的交わりを大切にすることを「キリストに忠実なれ」の中に読み取ることができるであろう。

<参考文献・資料等>

- ボルノー（1999）『人間学的にみた教育学』（浜田正秀訳）玉川大学出版部
- カー, E. H. (1984)『歴史とは何か』（清水幾太郎訳）岩波書店
- ドージャー, モード・バーク（2002）『日本の C.K. ドージャー・西南の創立者』（瀬戸義毅訳）， p.49（Maude Burke Dozier: *Charle Kelsey Dozier of Japan: A Builder of Schools*, Broadman Press, 1953
- 深谷松男（2007）『新・教育基本法を考える』日本キリスト教団出版局
- 古屋安雄（1993）『大学の神学』ヨルダン社
- ヘーゲル（1998）『精神現象学』（長谷川宏訳）作品社
- （Hegel, G.W.F.: *Phänomenologie des Geistes*, Suhrkamp taschenbuch wissenschaft 603, Frankfurt am Main, 1986）
- 学校伝道研究会編（1997）『キリスト教学校の再建（教育の神学第2集）』
- Jackson, P.W.: *Life In Classrooms*, Teachers College Press, New York 1990

(1968)

ヤスパース (1981) 『実存開明』(草薙正夫・信太正三訳) 創文社

ヤスパース (1999) 『大学の理念』(福井一光訳) 理想社

カント (1985) 『純粹理性批判(中)』(篠田英雄訳) 岩波書店

基督教学校教育同盟 (1959) 『日本におけるキリスト教学校教育の展望と課題
(II)』

西南学院 (2001) 『SEINAN SPIRIT C.K.ドージャー夫妻の生涯』, 西南学院
創立 80 周年記念 2001 (1996)

SEINAN GAKUIN UNIVERSITY Prospectus for 2004 entry

SEINAN GAKUIN UNIVERSITY Prospectus for 2008 entry

四国学院大学キリスト教教育研究所編 (2005) 『大学とキリスト教教育』 新
教出版社

高橋 敏 (2007) 『江戸の教育力』 筑摩書房

潮木守一 (2007) 「フンボルト理念とは神話だったのか」 広島大学高等教育開
発センター 大学論集 第 38 集 pp.171-187

<註>

1 潮木 (2007)

潮木は、フライブルク大学パレチェク教授 (Paletschek, Sylvia) の主張 (フンボルト理念=神話説) を紹介している。神話説によると、フンボルトの大学構想は、19 世紀を通じて誰もその存在を知られることはなかったと言う。ベルリン・モデルが使われるようになったのは、1910 年以降であり、ベルリン大学の栄光を正当化するために、主にシュブランガーが普及させたと言われている。

2 高橋 (2007), p.11

3 聖学院大学は、「面倒見のよい大学」をキャッチフレーズにしている。

4 カー (1984), p.40

5 cf.ヘーゲル (1998), p.548, ヘーゲルの歴史観は、次のように要約できる。

- 「自由という絶対者が自らを生成し、表現し、展開する過程が歴史である。」
(『哲学の木』講談社 p.1002)
- 6 ヤスパース (1981), p.141
 - 7 E.B.ドージャー, SEINAN SPIRIT, pp.99-100 所収 p.100 (1951年7月7日発行「西南学院創立35周年記念誌」より)
 - 8 SEINAN SPIRIT (2001), p.110 (1982年6月30日発行 西南学院大学広報より)
 - 9 Ibid., pp.110-111
 - 10 野球や庭球などスポーツが盛んだった当時の西南学院は、日曜日に試合があることが少なくなかった。1928年7月の全国高専野球西部予選大会で、西南学院は、長崎高商との試合(日曜日)をドージャー氏に内緒で行い、勝利した。その後、ドージャー氏の耳にはいり、準々決勝の対福岡高校戦に出場すれば、全員を退学処分とする厳しい姿勢をとり、学生らに同情の声が高まった。「ドージャーは試練の中で祈り、反省し、神のみ旨を求めたが、帰結するのは『キリストに忠実である』ということであり、他の回答を見出すことはできなかった。」(SEINAN SPIRIT, p.51)
 - 11 モード・バーク・ドージャー (2002), p.49
 - 12 SEINAN SPIRIT (2001), p.98
 - 13 Cf. SEINAN GAKUIN UNIVERSITY Prospectus for 2004 entry, p.9
 - 14 Cf. SEINAN GAKUIN UNIVERSITY Prospectus for 2008 entry, p.6
 - 15 深谷松男 (2007), pp.41-42
 - 16 Ibid., pp.73-85 深谷松男は、建学の精神が神からの信託に基盤を置き、「教育基本法を越えて」いることの重要性を説いている。
 - 17 SEINAN GAKUIN UNIVERSITY Prospectus for 2008 entry, p.6
 - 18 潜在的カリキュラム (hidden curriculum) は、社会学者 Phillip W. Jackson の造語。彼の著書 *"Life In Classrooms"* Holt Rinchart & Winston 1968 に登場。
cf. Jackson (1990), pp.33-35
- 一般的に、教育課程は学校教育目標にそって意図的・計画的・組織的に行わ

れる顕在的カリキュラム (manifest curriculum) を指す。それは、時系列的系統性 (sequence) と内容の広がり と深さ (scope) によって構成される。

19 O.F.Bollnow は、家 (Haus) や雰囲気 (Atomosphäre) のもつ教育的意義を指摘している。cf. ボルノー (1999) 特に、第 4 章 教育的な雰囲気 (p.56-、第 8 章 空間の人間学的な究明 庇護の空間としての家 (p.98-) 等を参照。

20 速水優氏 (聖学院名誉理事長、前日本銀行総裁) の講演 (「キリスト教学校で共に働く」) 第 48 回事務職員夏期学校 (2004 年 7 月 24~26 日) ref. 「キリスト教学校教育」2004 年 9 月号 キリスト教学校教育同盟発行

21 ヤスパース (1999), pp.222-223

ref. *Die Idee der Universität, Für die gegenwärtige Situation Entworfen von Karl Jaspers und Kurt Rossmann, Springer-Verlag, Berlin, Göttingen, Heidelberg, 1961*

大学の理念の源泉について、古屋安雄は、キリスト教信仰による懐疑主義の克服が前提となった、と指摘している。(古屋 (1993), p.169) また、彼は、高坂正顕 (1961) 「大学の理念—系譜と問題」による大学の 4 類型を紹介している。①神学的大学 (Theologische Universität)、②人文主義的大学 (Humanistische Universität)、③政治的大学 (Politische Universität)、④社会奉仕的大学 (Social service station's Universität)

それらは、目的別には、神のため、真理のため、国家のため、福祉のための大学と説明されている。(古屋,pp.163-166)

22 西南学院規定集によると「本学は、キリスト教を教育の基本として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学術を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。」(学則第 1 章総則第 1 目的第 1 条 [昭和 24 年 4 月 1 日制定]) とある。

23 cf.カント (1985) カントは、第 2 部弁証論の説明の前に、「純粋理性の概念」の「新しい名前」として「理念」(Idee) を定義している。それに引き続いて、第 2 部で「理念一般」「先験的理念」が説明されている。(p.30,31-)

24 基督教学校教育同盟 (1959), p.85 大村 勇が指摘する「世俗化」とは、

「キリスト教教師の少なさ、学生・生徒数の増加、高所得者層のみの入学の噂、福音宣教の熱意の低下」等である。また、クリスチャン・スカラ（学者）の育成を教会に求む主張もあった。（桜井信行、同書、p.94）

また、土井省吾は、建学の精神の具体化を考える人（機関）の必要性を主張している。（四国学院大学キリスト教教育研究所（2005）、pp.143-144）

25 このプロジェクトの内容は、個々の実際的な教育目的の実現に該当する。

26 松川成夫（1997）、p.102、「キリスト教に基づく教育を考える」、学校伝道研究会（1997）、pp.94-111 所収

27 潮木（2007）、p.178、潮木は、研究と教育は本質的に対立関係にあることを紹介している。「教えることのできる知識は、もはや研究を必要としない。まだ研究が必要な知識は教えることができない」ref. Ben-David Joseph（1977）、*Centers of Learning*, McGraw-Hill.

28 ヤスパース（1999）、p.11,14 彼の大学の理念は、潮木から歴史学的な事実に基づかない「フンボルト理念」を支持する立場として批判されている。cf.潮木（2007）、p.182

29 学生もまた、教えられるだけではなく、自ら研究に加わることもフンボルトは伝えていると言われていました。潮木（2007）、p.175

潮木によると「フンボルト理念」の基となった論文は、*Über die innere und äußere Organisation der höheren wissenschaftlichen Anstalten in Berlin*（unvollendete Denkschrift, 1809/10, Akad. Ausg. Bd.X; dazu verstreute Bemerkungen in Briefen und Aktenstücken）「ベルリンにおける高等教育機関の内的・外的構造」（1809/10年）と言う小さな論文の草稿であった。それが、世間に公開されたのは、1903年と言われている。cf. Gebhardt, Bruno（1903）*Wilhelm von Humboldts Politische Denkschriften*, 2.Bde.

30 註24参照